

帝キネ現代映畫

原作者 ヘルマン・ブーデルマン  
脚色者 民間敏雄  
監督者 印南義弘  
撮影者 津村博  
主演者 水原玲子

紹介  
タイトルに、原作ブーデルマンと断つてなかつたら脚案とは気がつかぬ位に巧みに脚色されてゐる。主家のために娘まで捧げて満足してゐる親、主家のために一生を捧げやうと決心して海外出張地から歸つて来た息子が、主家のために踏みこられた我が家を發見して、それから逃避しやうとする、その主家の娘の愛をも押けて――。さういふ古めかしいテーマだ。も一歩突

込んでは、こゝに新時代的な空氣と色彩を加へることは容易であり、さうしたら、これは生氣ある作品に成り得たのであるが、脚色者は、監督者はそれを成しなかつた。そのために飽迄も古い、殻の中に安住してゐたので、單なる新派劇に終らした感みがある。

南小路伯爵といふ哲學者が登場する。しかしその人生觀は少しも我々の生活とは關係のないもので、更らに感銘を與へない。下手なサブタイトル程度である。その計らひで主人公は愛と幸福をか得た筈であるが、それを観客には強く思はせないのは、主人公その他の性格が弱きに

過ぎて飛躍性が乏しいからだ。

キヤメラが敏捷に動いて、きこちない演出を扱つてゐるが、それでもさうさう圓滑を缺き、動きが停頓する。印南弘が如何にも小さく感じられる。餘韻をもつと持ち度く思ふ。

津村博が、またひびく古風に硬く動く、水原玲子がそれに對照して無技巧に動く、山路ふみ子がまたバタ臭くはね返る、この三人がどうもマツチしないのに、この映畫が素直に人の心を掴み得る原因がある。結局するところは、筋を追ふに追はれた形であつて、印南弘は、もう一度ゆつくりと出直すべきであらう。

——鈴木重三郎——  
興行價值——普通。 (八月十五日 常盤座)